

近代文学研究叢書
第 17 卷

昭和 36 年 8 月 15 日 印刷

昭和 36 年 8 月 20 日 發行

昭和 48 年 2 月 10 日 二刷發行

[¥ 2 5 0 0]

著 者	発 行 者	印 刷 者	発 行 所
昭和女子大学近代文学研究室	東京都世田谷区太子堂一ノ七 小林 寅 次	東京都千代田区神田錦町三丁目一四番地 梶 原 忠 幸	東京都世田谷区太子堂一ノ七 昭和女子大学近代文化研究所 振替口座東京一七〇八六七番 電話大代表 (二) 五一三一番



日文 701607018

163397

近代文学研究叢書

第十七卷



昭和女子大学

近代文学研究室

口 絵 写 真

A・W・ブレイフェア	佐々木醒雪	三富朽葉	塚原澁柿園	夏目漱石
------------	-------	------	-------	------

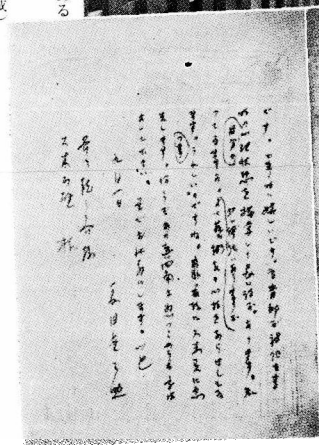
石 漱 目 夏



「それから」——明治四十三年一月刊
 (昭和女子大学蔵)
 「吾輩は猫である」——明治三十八年十月刊
 (昭和女子大学蔵)



→ 豊島区雑司が谷にある
 漱石の墓
 ↑ 漱石晩年の肖像
 (漱石全集所載)



下段左 芥川龍之介 久米正雄宛書簡
 (昭和女子大学蔵)
 「道草」——大正四年十月刊
 (昭和女子大学蔵)

塚 原 澁 柿 園

澁 柿 園 肖 像

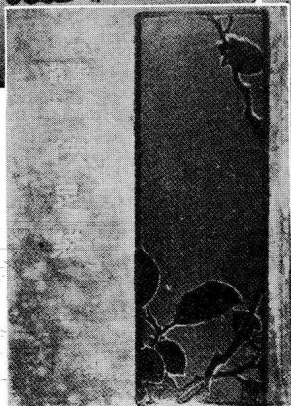
「淀殿」—明治四十一年一月刊
(昭和女子大学蔵)



「最上川」—明治二十八年十二月刊
(昭和女子大学蔵)



「俠足袋」—明治四十二年六月刊
(昭和女子大学蔵)



伊達政宗

澁柿園著
春陽堂刊



↑
「おあき」—明治二十八年十一月刊
(昭和女子大学蔵)

上右「伊達政宗」—明治三十年十月刊
(昭和女子大学蔵)

三 富 朽 葉

朽葉肖像 (明治四十三年撮影)

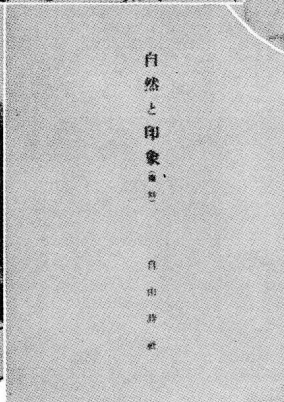


旅の仲間へまじりて
 日は居やうとあやね
 くはあふ事をせむに
 かしし横着にやえん
 おけや駄目ん
 人のほめやうがけあ
 ねうが泣あうが自
 の為登いこもすうの
 一歩あさ
 お前へ女あう納うと
 遠慮あうたらうが

石井菊枝氏宛書簡―(三富菊枝氏蔵)



「三富義臣君追悼録」―大正六年十月刊 (昭和女子大学蔵)

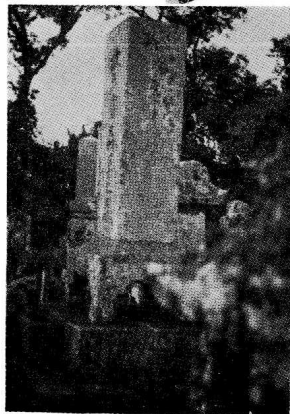


「三富朽葉詩集」
大正十五年十月刊
(昭和女子大学蔵)

「自然と印象」復刻本―昭和三十三年十月刊
(昭和女子大学蔵)



↑ 遭難の地 銚子君ガ浜
手前海に面し大正七年涙痕の碑、建立
← 沓岐にある朽葉の墓

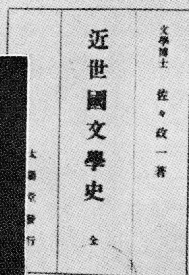
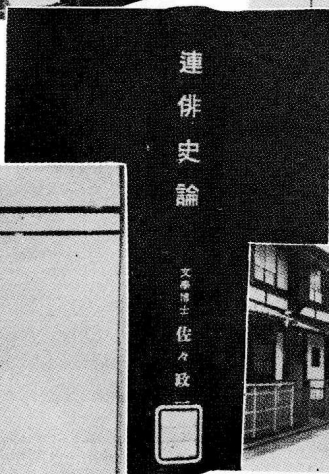


佐々醒雪

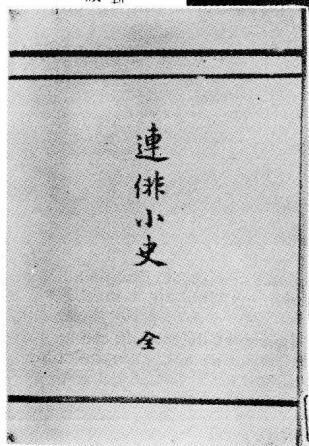


「俳句大観」—大正五年十月刊
(昭和女子大学蔵)

「連俳史論」
—昭和三年四月刊
(昭和女子大学蔵)



「連俳小史」—明治三十年七月刊
(昭和女子大学蔵)



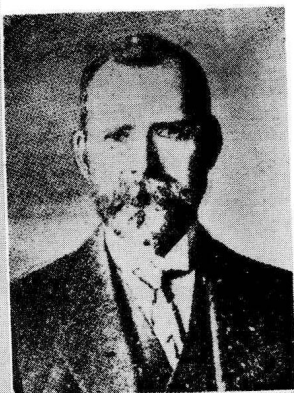
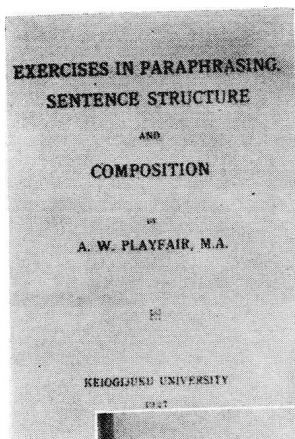
醒雪の旧居跡—京都府左京区吉田二本松町

中段右 「近世国文学史」—明治四十四年七月刊

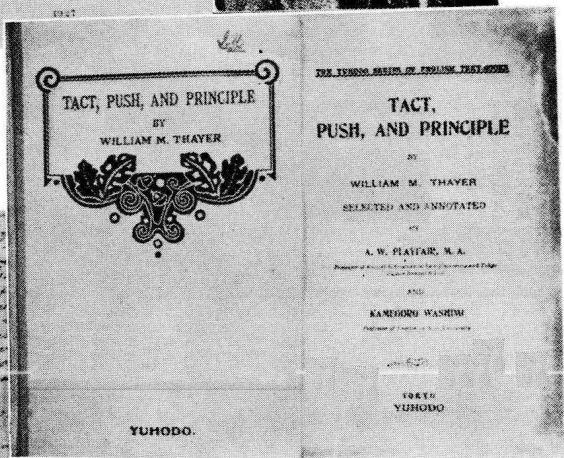
(昭和女子大学蔵)

上段右 帝国大学卒業後の明治三十年頃の醒雪前列右端
左端大町桂月 後列右端武島羽衣 左端上田敏
(武島羽衣氏蔵)

A・W プレイフェア



ブレイフエア肖像（英語青年三八卷八号所載）



The Yohodo Series of English
Text-Books 大正十三年十月〜十二月刊
(井上磯吉氏蔵)

上段左 Exercises in paraphrasing
Sentence Structure and Composition

「英語青年」三八卷八号掲載のプレイフェア
書簡

[illegible]

目次

口	繪	
第十七卷の成立	昭和女子大学近代文学研究室	(一〇)
凡例	昭和女子大学編集室	(一五)
夏目漱石		(一七)
塚原澁柿園		(二七)
三富朽葉		(二五)
佐々醒雪		(三三)
ブレイク		(三六)

第十七卷の成立

本巻は大正五年十二月から同六年十二月までに歿した左の五名の調査研究を取めた。

夏目漱石は慶応三年江戸馬場下横町の名主夏目小兵衛直克の五男に生まれ、生後間もなく里子に、三歳のとき鹽原昌之助の養子となり数年後実家に帰った。三島中洲の二松学舎で漢学を修め、島崎柳塲らと回覧雑誌を作り「正成論」等を執筆、明治十七年大学予備門入学、文学を生涯の業と志し英文学を専攻、二十二年正岡子規を知り俳句の手ほどきを受け、俳句や写生文を雑誌「ホトトギス」に発表、又漢詩文をもよくした。「英国詩人の天地山川に対する觀念」を「哲学雑誌」に掲載、のちに俳句は河東碧梧桐、高濱虚子等と名をつらねた。二十六年東京帝国大学文科大学を卒業同十月東京高等師範学校の講師嘱託、二十八年松山中学ついで第五高等学校に教鞭をとった。傍ら諸雑誌に専攻の研究論文を発表した。二十九年中根鏡子と結婚、三十三年から二十年英国に留学、一行に藤代素人、芳賀矢一、稻垣乙丙、戸塚機らがいた。滯英中「文学論」の執筆を思いつたが、孤独と学問的焦燥から神経衰弱となった。帰国後の三十六年から第一高等学校で英語を、東京帝国大学で英文学を講義した。又この頃英詩や随筆風の小品、翻譯、新体詩などを発表、碧梧桐、四方太らの山会にも出席。三十八年「吾輩は猫である」を「ホトトギス」誌上に連載して一躍文名をあげ、「倫敦塔」以下「野分」に到る浪漫的な諸短篇を相ついで発表、更に「坊ちゃん」及び「草枕」で非人情と低徊趣味を標榜し、四十年、すべての教職を離れて東京朝日新聞専属社員となり朝日紙上に執筆、その第一回連載小説「眞美人草」

を始めとして「坑夫」「三四郎」「それから」「門」を執筆、ヨーロッパの個人主義思想をふまえた倫理観、人生観によつて独自の文学をうちたてた名声と地位を不動のものとした。四十三年胃潰瘍で伊豆修善寺に静養、その後は胃疾と神経衰弱と身辺の不調等に苛まれつつ自己の芸術を掘り下げ「彼岸過迄」以後の諸作のように人間探求と全裸な心理の解剖につとめ、晩年の「行人こころ」「道草」で人間のエゴイズムと戦う人生苦を描いて所謂「則天去私」の境地に到り理想と現実の矛盾相剋をリアリティに描写、近代的、理智的小説の新境地が期待されようと云う矢先、大正五年十二月「明暗」執筆中胃潰瘍で倒れた。享年四十九歳。

塚原澁柿園は嘉永元年幕臣市之丞昌之の長男として江戸市ガ谷合羽坂上に生まれ、君臣の道義の篤い家風の中に幼時を過ごし、維新の兵馬倥傯の間に人となった。元治元年京都二条城の定番を勤め、小林榮太郎に経書を学び、維新後徳川家に従つて駿河の田中に移り沼津兵学校で洋学を、集学所で武術を治めた。その後、島田三郎の経営する横浜毎日新聞に入社、島田豊寛、栗本鋤雲、宮原善三郎等と知り、この頃仮名垣魯文にも知遇を得た。のち同紙の編集長となったが筆禍により禁獄十カ月、十一年東京日日新聞に転じ主筆の福地櫻痴と識り、以後編集につとめた。十五年朝鮮京城の事変の折特派され「入韓紀実」を執筆、帰国後同紙の小説欄を担当して櫻痴と共訳の「コンタリニ・フレミング」や翻案の「曼府の叛乱」を掲載、更に当時の政治や社会問題に取材して「号外附録」「人造洪水」「虚無党」等の諷刺小説を発表して大衆から歓迎された。その後は「由井正雪」「俠足袋」「水野越前」「木村重成」等一連の歴史小説に筆を染め高潔、忠誠な英雄と豪傑の生活とその周辺を描写、人よりも事に重点をおき、態度は真摯で史実考証も精密、豪快な歴史小説は彼の本領とする

ころ。又口演体の「天草一揆」も注目すべき作品、すべて民心の啓発と進取的な国民精神の高揚に寄与するところ多大、晩年には文芸委員に推されたが大正六年「烈女さつ」執筆中脳溢血で死去、享年七十歳。

三富朽葉は明治二十二年八月玄海の孤島老岐に生まれた。島の風光は彼の繊細感傷の氣質に憧憬と空想、哀愁をはぐくんだ。六歳の春三富浄の養子となったが、のち実父母と上京、富士見小学校から暁星中学へ入学。フランス風の教育に培われてフランス文学愛好の素地を作り、四十年早稲田大学文学科に入学、詩才を表わし「文庫」誌上に作品を発表、友樹会を結び機関紙「深夜」を発刊、詩歌、文芸時評を掲げた。この頃生田春月とも交遊、四十一年マラルメ、ブレモン等の訳詩を試みた。四十二年五月人見東明、加藤介春、福田夕咲等の自由詩社に加り、パンフレット「自然と印象」に二十二篇の詩を発表、洗練された感性和繊細な作風は注目された。四十三年には *Soirees Grimaes* 倶楽部を結成、福士幸次郎、増田篤夫等とフランスの詩文に情熱をもやし、「薄命文士会」や「象徴芸術」発行の企画もあった。ヴェルレーヌ、マラルメ、ランボー等の訳詩及びヴェルハーレン研究、大正六年避暑地より送った散文詩「微笑についての反省」はボードレール等のフランス近代詩の影響を受けた象徴詩で華やかな中にも哀愁が迫って語感の清新さを特徴としたがはからずも絶筆となった。大正六年八月犬吠崎君が浜にて今井白揚と遊泳中に溺死。享年二十七歳。

佐々醒雪は明治五年京都吉田山麓に生まれ、代々武士の家柄で平田神道の矢野玄道は叔父にあたる。幼少から俳諧文学を耽読、十三歳で家督を相続、幼時は「絵本保元平治物語」「絵本太平記」等豪傑を心に描き軍人を夢みて湘南学舎、平安義塾を経て第三高等中学校に入学、二十六年東京帝国大学の国文学科に入学、同好の

友人等と「同楽園叢誌」の編集や雑誌「一点紅」を発行し、在学中「連俳小史」を起稿して「帝国文学」に発表、小説「新聞売」を著わした。二十七年大野洒竹、笹川臨風、水野醉香等の帝大派によって「筑波会」を起し「日本派」、「秋声会」に対抗、二十八年「居候日記」を執筆、卒業後は第二高等学校、山口高等学校の教壇に立ち学生に感銘を与えた。この間「連俳小史」、「うづら衣評釈」を著わし、軽視されていた江戸文学に注意し、俳諧の史的展開を明らかにした。三十四年上京、雑誌「文芸界」を創刊、爾来廃刊（三九・一二）まで編集を担当し評論に筆を揮った。三十九年東京高等師範学校、東京帝国大学、早稲田大学等に教鞭をとりながら従来等閑された江戸庶民の好む小唄、浄瑠璃等の研究に着手、「俗曲評釈」全四篇を上梓、四十四年「新釈源氏物語」「近世国文学史」を出版、江戸文学研究資料の散逸を防止、四十五年文学博士の学位をうけた。大正五年巖谷小波と共に博文館から「俳諧叢書」全七編を編集、註釈、句集、作法、俳文、逸話、紀行等を網羅、主要な文献の普及につとめた。「俳句大観」は発句一万二千余句を集めて索引をつけ、その嚆矢となる。その業績は江戸文学一般の研究から「作文教授法」「修辭学」等広汎に亘っている。大正六年十一月腸チフスに罹り永眠した。享年四十六歳。

A・W・ブレイフェアは明治三年カナダに生まれ、アルモンド・ハイスクールを経てクイーンズ大学に学び、二十九年英語学において最優等証、金牌をえて卒業、翌年マスター・オブ・アーツの学位を受け、のち同大学ラテン語講師となった。三十五歳の明治三十八年来日、同年九月曹洞宗大学に勤め、その後国民英学会、慶応義塾に英語教師として就任、英文法書 "Exercises in Paraphrasing, Sentence Structure and

“Compasion”を慶応義塾出版局より発行、更に大正三年十月有朋堂から英語テキストシリーズを上梓した。大正二年九月から東京高等師範学校、五年四月からロレンス教授の後任として東京帝国大学の英吉利語及び英吉利文学の講師となるなど教授の傍ら英語研究に没頭した。在日十三年のプレイフェアの生活は質素で、すべて研究と教育にゆだねたものであった。英文学は十八世紀以降の近代文学に造詣深く、英文学の体系をたて豊かな学殖と秀れた識見によって感化し幾多の人材の養成につとめ大正六年十二月心臓麻痺で倒れた。享年四十七歳。

附記

本巻刊行に当り、文部省より学術図書刊行助成金を支給されたことに感謝するとともに、本叢書の使命の重きを痛感し、ますます努力して大方の御期待にそうよう覚悟をあらたにした。

凡 例

一、研究調査に着手してから本叢書刊行に至るまで、凡そ二十二年を要しているので、指導者中で岡田哲藏、福井久藏、池田龜鑑の三先生はすでに鬼籍に入り、研究担当者中にも病でたおれたものが数名ある。本叢書をこれらの人々に見てもらったならばさそおよろこび下さるであろう。謹んで靈前に献上する。

二、本叢書は卒業期に近い生徒の中から担当者を選び、調査研究の範囲、方法、次第などを相談して、先ず第一に業績の検討に着手した。不明、疑問、困難、迷路などにつき当りつつ一年ぐらいするうちに明瞭になるので、次の年から生涯と遺跡を究めてからいよいよ論文作成にとりかかった。このとき、材料の批判、整理、布置、論文の構成などについて相談しながら脱稿に至る。ついで修訂、校閲を経てから編集という順で、その間約二カ年が費される。

三、収録事項の研究に対し、直接間接に協力した学徒は延三千名に上るが、その協力と、歳月の恩恵に加うるに学界、文壇、教育界、操觚界など各界先輩の懇切な教示と、遺族及び関係者の好意を感謝する。

四、年表で著作というのは、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを指し、資料とは、第三者の考説、論評、感想等の文献を指すのである。従つて死後刊行された全集物や編集物は著作年表に、第三者の解題や解説の如きは資料年表の中に収めた。又、単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名